

延岡市文化財調査報告書 第42集

# 市内遺跡

平成21年度市内遺跡発掘調査事業  
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2010

延岡市教育委員会

## 序 文

本書は延岡市教育委員会が国県補助を受け実施した、市内遺跡発掘調査事業の調査報告書です。

延岡市は宮崎県の北部に位置し、豊富な水資源を利用した県内最大の電気化学工業集積地として栄え、教育文化・産業経済の牽引役を担っています。江戸時代は日本最南端の譜代藩、延岡藩の城下町として栄えました。その遺産の一つである延岡城跡を利用し、市民参加による「のべおか天下一薪能」、「城山かぐらまつり」等が開催されています。近年は九州保健福祉大学の開学や、国道10号延岡道路及び国道218号北方延岡道路の部分開通など永年の課題も解消されつつあり、大きな変革期を迎えていました。また、合併に伴い市有面積が九州2番目の広さを持つようになり、豊富な伝承芸能や農林水産資源を活かした、新たな活気あるまちづくりが始まったところです。

本書が文化財保護への理解を深める一助として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたり宮崎県教育委員会をはじめ、地権者並びに開発事業関係者のご協力をいただきましたことに、深く感謝いたします。

平成22年3月

延岡市教育委員会

教育長 町田訓久

## 例　　言

1. 本書は各種開発事業に伴い、延岡市教育委員会が国・県補助を受け、平成21年度に実施した市内遺跡発掘調査報告書である。
2. 本年度は、7箇所の試掘・確認調査を実施した。
3. 昨年度調査を実施した、舞見田地点、延岡城内遺跡(第19次)、延岡城内遺跡(第20次)、南久保山第1地点、北久保山遺跡(第1次)、東原遺跡(第5次)、東原遺跡(第6次)は本書に掲載した。
4. 年度末に調査した今井野遺跡(第18次)は次年度に報告する。
5. 発掘現場での実測、写真撮影等の記録は発掘作業員の補助を得て、山田聰、小野信彦、尾方農一、高浦哲、甲斐康大が行った。
6. 整理作業は延岡市教育委員会で行った。本書に使用している遺構の製図、図面作成、出土遺物の撮影・実測・製図・図面作成は、敷石サヨ子、仁尾佐代子、原田洋子、藤本千鳥、森有美、山本敬子の協力を得て、各現場の担当者が行った。
7. 本書における方位は磁北を示し、レベルはすべて海拔高である。
8. 本書の執筆は各担当者が行い、編集は尾方が行った。
9. 出土遺物及び調査記録類は、延岡市教育委員会で保管し、今後、展示公開する予定である。



Fig.1 延岡市位置図

# 本文目次

## 第1章 はじめに

1.はじめに	1
--------	---

## 第2章 調査の記録

1.舞見田地点	5
2.延岡城内遺跡(第19次)	9
3.延岡城内遺跡(第20次)	15
4.南久保山第1地点	19
5.北久保山遺跡(第1次)	20
6.東原遺跡(第5次)	21
7.東原遺跡(第6次)	22
8.日の出町1丁目角原地点	23
9.上多々良遺跡(第12次)	24
10.沖田貝塚	38
11.天下中須遺跡(第1次)	39
12.野田八田遺跡(第4次)	40
13.天下城山遺跡(第3次)	42

## 報告書抄録

# 挿図目次

Fig. 1 延岡市位置図	
Fig. 2 平成21年度市内遺跡発掘調査地分布図 (1/50,000)	3
Fig. 3 平成21年度市内遺跡発掘調査地分布図 (旧北方町・1/50,000)	4
Fig. 4 舞見田地点位置図(1/15,000)	5
Fig. 5 舞見田地点第2区土層断面図	6
Fig. 6 舞見田地点調査区配置図(1/400)	7
Fig. 7 延岡城内遺跡(第19次)位置図 (1/15,000)	9
Fig. 8 延岡城内遺跡(第19次)調査区配置図 (1/2,500)	9
Fig. 9 延岡城内遺跡(第19次)上層断面図 (1/80)	11
Fig. 10 延岡城内遺跡(第19次)出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 11 延岡城内遺跡(第20次)位置図 (1/15,000)	15
Fig. 12 延岡城内遺跡(第20次)調査区配置図 (1/2,500)	15
Fig. 13 延岡城内遺跡(第20次)上層断面図 (1/80)	16
Fig. 14 延岡城内遺跡(第20次)出土遺物実測図 (1/3)	18
Fig. 15 南久保山第1地点位置図	19
Fig. 16 南久保山第1地点調査区配置図	19
Fig. 17 北久保山遺跡(第1次)位置図	20
Fig. 18 北久保山遺跡(第1次)調査区配置図	20
Fig. 19 東原遺跡(第5次)位置図	21
Fig. 20 東原遺跡(第5次)調査区配置図	21
Fig. 21 東原遺跡(第6次)位置図	22
Fig. 22 東原遺跡(第6次)調査区配置図	22
Fig. 23 日の出町1丁目角原地点位置図	23
Fig. 24 日の出町1丁目角原地点調査区配置図	24
Fig. 25 上多々良遺跡(第12次)位置図	24
Fig. 26 上多々良遺跡(第12次)調査区配置図	24
Fig. 27 上多々良遺跡(第12次)出土遺物実測図① (1/2)	31
Fig. 28 上多々良遺跡(第12次)出土遺物実測図② (1/2)	32
Fig. 29 上多々良遺跡(第12次)出土遺物実測図③ (20~25 1/2 26~27 1/3)	33
Fig. 30 上多々良遺跡(第12次)山上遺物実測図④ (28~32 1/2 1~16 1/1)	34
Fig. 31 沖田貝塚位置図	38
Fig. 32 沖田貝塚調査区配置図	38
Fig. 33 天下中須遺跡(第1次)位置図	39
Fig. 34 天下中須遺跡(第1次)調査区配置図 (1/2,000)	39
Fig. 35 野田八田遺跡(第4次)位置図	40
Fig. 36 野田八田遺跡(第4次)調査区配置図	40
Fig. 37 天下城山遺跡(第3次)位置図(1/25,000)	42
Fig. 38 天下城山遺跡(第3次)調査区配置図 (1/5,000)	42

## 表 目 次

第1表 平成21年度市内遺跡発掘調査地一覧	2
第2表 延岡城内遺跡(第19次)出土遺物観察表	
.....	1 3
第3表 延岡城内遺跡(第20次)出土遺物観察表	
.....	1 8
第4表 上多々良遺跡(第12次)出土遺物観察表	
.....	3 4
第5表 上多々良遺跡(第12次)出土玉類観察表	
.....	3 5

## 写 真 目 次

PL. 1 舞見田地点近景(北から)	5
PL. 2 舞見田地点第1区調査状況	5
PL. 3 舞見田地点第1区石垣検出状況	8
PL. 4 舞見田地点第3区調査状況	8
PL. 5 延岡城内遺跡(第19次)近景(南から)	9
PL. 6 有馬家中延岡城下屋敷付絵図(部分・17世紀後半)明治大学博物館蔵	1 0
PL. 7 延岡城下垣屏風(部分・17世紀末)個人蔵	1 0
PL. 8 延岡城内遺跡(第19次)土層断面・遺物出土状況(北西から)	1 1
PL. 9 延岡城内遺跡(第19次)調査状況 1(北から)	1 3
PL. 10 延岡城内遺跡(第19次)調査状況 2(南から)	1 3
PL. 11 延岡城内遺跡(第19次)遺物・炭化物等出土状況	1 4
PL. 12 延岡城内遺跡(第19次)出土遺物	1 4
PL. 13 延岡城内遺跡(第20次)近景(南西から)	1 5
PL. 14 延岡城内遺跡(第20次)上層断面(南西から)	1 6
PL. 15 延岡市街地図(原図は大正12年・昭和39年拡大模写図)内藤記念館蔵	1 7
PL. 16 延岡市街地空撮(昭和23年・GHQ撮影)	1 7
PL. 17 延岡城内遺跡(第20次)調査状況1(北から)	1 8
PL. 18 延岡城内遺跡(第20次)調査状況2(南から)	1 8
PL. 19 延岡城内遺跡(第20次)出土遺物	1 8
PL. 20 南久保山第1地点調査状況	1 9
PL. 21 北久保山遺跡(第5次)調査状況	2 0
PL. 22 東原遺跡(第6次)調査状況	2 1
PL. 23 東原遺跡(第6次)調査状況	2 2
PL. 24 日の出町1丁目角原地点調査状況	2 3
PL. 25 上多々良遺跡(第12次)空撮	2 5
PL. 26 上多々良遺跡(第12次)土器集中部A出土状況	3 5
PL. 27 上多々良遺跡(第12次)調査前近景(東から)	3 6
PL. 28 上多々良遺跡(第12次)近景(南から)	3 8
PL. 29 沖田貝塚調査状況	3 8
PL. 30 天下中須遺跡(第1次)調査状況	3 9
PL. 31 野田八田遺跡(第4次)調査前近景(南から)	4 1
PL. 32 天下城山跡遺跡(第3次)調査状況	4 2

# 第1章 はじめに

## 1. はじめに

延岡市は宮崎県の北部に位置し、九州山地や大崩・祖母・傾山系に源を発し日向灘に注ぐ五ヶ瀬川・北川・祝子川の下流域にある。これらの河川によって形成された沖積平野に市街地や住宅地、工業地帯が広がり、宮崎県北部の中心都市となっている。豊かな自然環境を利用し、古くから農林水産業が盛んである。また、豊富な水資源を利用した電気化学工業を中心とする県内有数の工業集積地でもある。中心市街地には近世延岡藩主の居城であった延岡城跡があり、「千人殺し」と呼ばれる高石垣を中心とした石垣群が残り、現代の都市景観と歴史的景観が融合する街並みが形成されている。

本年度における本市の埋蔵文化財保護行政は、景気の動向を反映し民間開発は大小問わず、引き続き減少傾向にあった。一方、公共事業では大規模な開発が多く行われている。天下町では「クレアパーク延岡」工業団地の造成、古川町・岡富町では区画整理事業等の大規模事業が進捗中で、新たに北方町で、新最終処分場建設事業が本格化し、それに伴う埋蔵文化財の発掘調査も始まったところである。また、延岡北方道路の北方 IC～藏田区間での埋蔵文化財の発掘調査も始まり、東九州自動車道の新直轄方式による建設が行われている蒲江 IC～北川 IC 間も、埋蔵文化財の調査と並行し建設事業が進められている。これらの開発事業やその関連事業と埋蔵文化財保護との調整資料を得るために、試掘・確認調査を実施した。

## 2. 調査の組織

調査主体 延岡市教育委員会

教 育 長	町 田 則 久
教 育 部 長	笠 江 孝 一
カルチャーセンター担当副参事兼カルチャーパークのべおか館長・文化課長	渡 遼 博 吏
文化振興対策監兼文化課長補佐・文化振興係長	大 島 紀 世 子
文化課文化財係長	山 田 智 聰

庶務担当 文化振興係主任主事

松 岡 直 子

調査担当 文化課文化財係長

山 田 智 聰

文化財係専門員

小 野 信 彦

文化財係主任主事

尾 方 農 一

文化財係主任主事

高 浦 哲

文化財係主任

甲 斐 康 大

#### 発掘作業員

安藤登美子、市来三郎、岩切直美、内倉フナ子、上杉和正、甲斐淳彦、甲斐カツキ、甲斐カズエ、  
甲斐さよみ、甲斐ひとみ、甲斐保子、甲斐如高、金川富子、神崎守二、工藤洋子、酒井清子、  
篠原弘助、白石良子、高橋サチ子、津野和幸、中川文夫、中川由美子、林田裕子、平尾美千代、  
古谷新一、柳田志保、山内伸夫、山内ゆかり

#### 整理作業員

敷石サヨ子、仁尾佐代子、原田洋子、藤本千鳥、森有美、山本敦子

なお、調査にあたって地権者の方をはじめ、地区住民の方々、開発部局・関係機関及び開発事業者等に多くの配慮をいただいた。

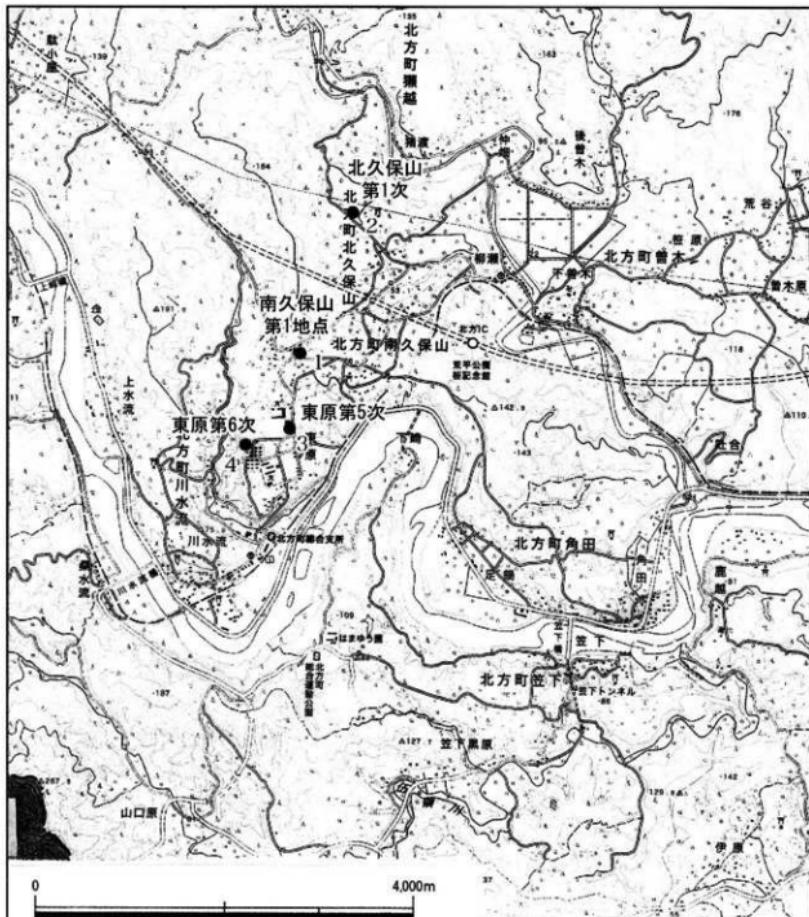
番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査面積	開始日	終了日
1	日の出町1丁目角原地点	日の出町1-9-10	個人住宅	5.0 m <sup>2</sup>	20090430	20090501
2	上多々良遺跡(第12次)	古川町430	遺跡発見	1,400 m <sup>2</sup>	20090518	20090609
3	沖田貝塚	小野町口広橋北詰	市道改良	7.68 m <sup>2</sup>	20090617	20090617
4	天下中須遺跡(第1次)	天下町169 外	市道改良	46 m <sup>2</sup>	20090721	20090824
5	野田八田遺跡(第4次)	野田町5290 外	集合住宅	15 m <sup>2</sup>	20091018	20091028
6	天下城山遺跡(第3次)	天下町527-乙 外	個人住宅	11 m <sup>2</sup>	20091209	20091215
7	今井野遺跡(第13次)	天下町1208-1 外	工業団地	112.5 m <sup>2</sup>	20100312	20100320

第1表 平成21年度市内遺跡発掘調査地一覧



1. 日の出町1丁目角原地点    2. 上多々良遺跡(第1・2次)    3. 沖田貝塚  
 4. 天下中須遺跡(第1次)    5. 野田八田遺跡(第4次)    6. 天下城山遺跡(第3次)  
 7. 今井野遺跡(第1・3次)

Fig. 2 平成21年度市内遺跡発掘調査区分布図(1/50,000)



- |                             |                                |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1. 南久保山第1地点<br>3. 東原遺跡(第5次) | 2. 北久保山遺跡(第1次)<br>4. 東原遺跡(第6次) |
|-----------------------------|--------------------------------|

Fig. 3 平成20年度市内遺跡発掘調査区分布図(北方町 1/50,000)

## 第2章 調査の記録

### 1. 舞見田地点

所在地 延岡市北川町川内名 6443-2 外  
調査原因 農業基盤整備事業  
調査期間 20090212～20090312

調査面積 60.0 m<sup>2</sup>  
担当者 尾方  
位置 慎重工事

#### (1) 位置と環境

舞見田地区の所在する北川町は、延岡市の北部に位置し北は大分県と境を接する。森林資源が豊富で県内有数の山林面積を誇り、町内を北から南に貫流する北川の豊かな水産資源にも恵まれている。秋には鮎漁が盛んに行われ、青い竹ざさでせきを作つて落鮎を獲る、北川独特の漁法「しばざき漁」は秋の風物詩の一つである。また、ホタルの名所として知られ、5月下旬から6月中旬の夜には、無数のゲンジボタルが宙を漂う幻想的な光景が見られる。町の西側には、多くの登山家に愛好されている大崩山（標高1,643m）がある。その大崩山一帯を源流域とする祝子川渓谷は、自然の造形美が美しく、まさに山紫水明の地である。祝子川渓谷沿いに自生する孟宗錦明竹（もうそうきんめいいちく）は、現在のところ全国に3ヶ所しかその自生地が確認されておらず、国の天然記念物に指定されている。

今回調査を行つた舞見田地区は、北川の支流である小川の左岸に位置する。舞見田地区から約2km下流に行くと北川と合流する。北川は合流点から更に6km下り河口に到達する。小川は大分県境の山々を源流域とし、多くの支流を集め、大きく蛇行をしながら流れ下る。今回の調査地は右岸側に大きく蛇行した地点で、その内側（左岸側）に形成された砂洲にある。

当地に農業基盤整備事業の計画があることから、市北川町総合支所農林より文化財所在の有無について照会を受けた。近年、北川は大きな洪水を経験しており、その影響等も考慮されるが、付近に庚申塔なども多く散見し、地形的な観察からも埋蔵文化財の所在する可能性が考えられることから、試掘調査を実施した。



Fig. 4 舞見田地点調査区位置図(1/15,000)



Pl. 1 舞見田地点 近景(北から)



Pl. 2 舞見田地点調査状況

## (2) 調査の概要

今回の調査では、まず調査区の設定に苦慮した。まず調査対象地が広い。次に、計画段階であり耕作が行われている。耕作等への影響から地権者の承諾も受けにくい等の条件があった。そこで市北川総合支所農林課及び地権者の代表者と協議の上、調査箇所を4ヶ所に限定して行った。調査区の設定には、注意を払い可能な限り全体像を掴めるようを行った。

調査地の砂州は川の流れに沿って、上流から下流に約1.6km、最大幅は0.4kmある。第1区は調査地の南端、最下流側に設定した。第2区は調査地のほぼ中央の川から最も離れた地点に設定し、第3区は可能な限り川に近い地点に設定した。第4区は調査地の北端、最上流側に設定し調査を行った。各調査区とともに、古水田面の検出と遺物の収集に主眼を置き、堆積状況の確認のためにトレンチを設定し調査をおこなった。

第1区の調査は南北方向、東西方向にそれぞれトレンチを設定し行った。両トレンチで石垣の様な積み石を確認したため、全体的に調査範囲を広げ確認を行った。その結果、高さ約1~1.2mの石垣を検出した(P 8/PL 3)が、周辺から出土する遺物から昭和30年頃のものと推測された。また、石垣は更に下層で、交わるようにして検出され、昭和30年頃の水田面は現在より、低い位置で営まれていた事が確認できた。第1区の基本的な層序は、1~2層は前耕作土、3層はその基盤層にある。4~6層を経て、7層で水田基盤層を形成している。また、石垣を境に層序が変化し、別の水田基盤層が見える。表土から、約1.4mで荒い砂などがレンズ状に散見でき、いわゆるクロスラミナ(斜行葉理)を形成している。よって付近に古水田面の残存可能性は低いと判断される。

第2区の調査は、南北方向にトレンチを設定し行った。その基本的な層序(Fig. 5)は以下の通りである。

- 1層 暗灰色粘質土(砂混じり)
- 2層 淡黄灰褐色粘質土
- 3層 暗青灰褐色土
- 4層 淡青灰褐色土(鉄斑を含む)
- 5層 淡暗青灰褐色土(鉄斑、マンガン斑を含む)
- 6層 暗黄灰褐色土(鉄分を含み暗橙色がかる)  
マンガン斑の固化が見られる)
- 7層 淡黄褐色土(シルト質の均質な堆積)

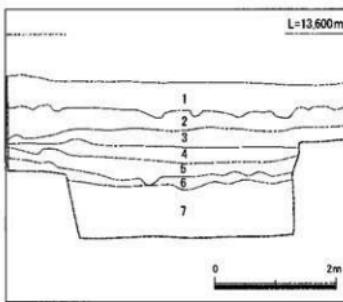


Fig. 5 舞見田地点第2区土層断面(1/40)

第3区は最も河川に近い位置にあたる。南北方向にトレンチを設定し調査を行った。以前は水田であったようだが、現在は畑地として牛の飼料が作付けされていた。現地表面から約50cmの1~3層は現在の耕作及び、以前の水田耕作に関係する堆積である。1層は暗灰褐色土(現耕作土)、2層は淡暗橙色の鉄斑が固化が見られ、水田の基盤層を形成している。3層はやや砂質を帯びた淡青灰褐色粘質土である。4~6層は砂や円礫による互層で、クロスラミナを形成する河川性の堆積層である。よって、この付近にも古水田面の残存する可能性は低いと判断される。(P 8/PL 4)

第4区の調査も南北方向にトレンチを設定して行った。現地表面から約1.5mを掘り下げるが、岩碎等による埋土であった。その下位層は第3区と同じ様相を呈し、当地区での古水田面の検出は難しいと判断される。

#### (3) 検出遺構

石垣（昭和30年代）

#### (4) 出土遺物

なし。

#### (5) まとめ

今回の試掘調査は、舞見田地区やその近郊で行われた、ほぼ初めての埋蔵文化財調査であった。

前述のように、第1～第4区の4箇所の調査区を設定し調査を行った。それぞれの調査区において、現もしくは前耕作土等の最近までの耕作に関わる層を確認した。そして、その下層はほぼ河川性の堆積層であることが確認された。遺物は出土していない。以上の結果から、古水田等の埋蔵文化財が所在する可能性は極めて低いものであると判断される。

今後、周辺地の調査例等を増やし、埋蔵文化財包蔵地の分布や広がりを把握することが、早急な課題である。

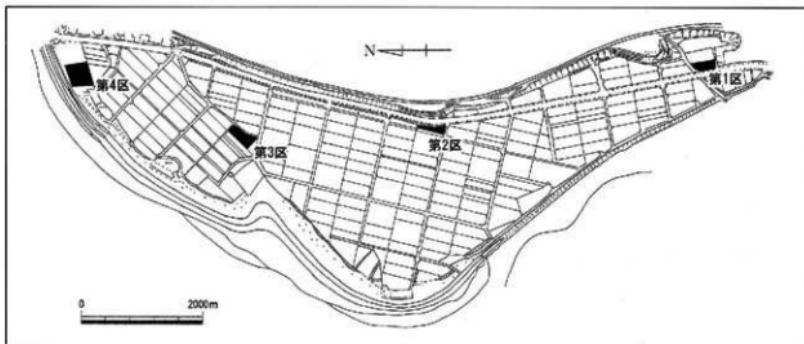


Fig. 6 舞見田地点調査区配置図(1/400)



PL. 3 舞見田地点第1区石垣検出状況



PL. 4 舞見田地点第3区調査状況

## 2. 延岡城内遺跡（第19次）

所在地 延岡市桜小路 369-3

調査原因 個人住宅建設

調査期間 2009年2月25日～2009年3月27日

調査面積 10.0 m<sup>2</sup>

担当者 山田

処置 慎重工事

### （1）位置と環境

延岡（縣）城は、慶長8年（1603）に初代延岡藩主高橋元種によって築かれた日向国最大の近世城郭で、五ヶ瀬川下流域に形成された中州（川中地区）にある独立丘陵を中心と所在する。城の東側には河川堆積物による微高地が広がり、北町、中町、南町の城下町や水運を利用した船倉（舟入）が造られた。元種後に入封した有馬氏は柳沢町、川北地区の元町、紺屋町、博労町を整備し、所謂延岡七町が完成した。この他、町屋と城内との境には五ヶ瀬川から南北方向に直交する外堀（大正末期に埋立て）が造られ、妙專寺付近から西に折れて延岡城南裾の米蔵・武具蔵（城山公園南駐車場付近）まで続き、船藏に通じる堀（本町通・大正期は堀川通りと呼ばれた）とともに主要な物資輸送ルートとして利用されていたようである。また、外堀中央部付近には、城内への玄関口となる城下最大規模の京口門が整備され、入口の外堀上には京口橋が架かり、当時の活気溢れる城下町の情景が「延岡城下図屏風」に描かれている。この他、北町に白道寺（現三福寺）、中町に誓敬寺、照源寺、南町に専念寺、妙專寺、光勝寺、本善寺（廢寺）が配置され、人口集中による城下町の経済活動活性化とともに、寺の空間を活用した戦時における駐屯機能確保や防災機能強化を狙ったものと考えられている。

### （2）調査の概要

今回の調査地は、二階門跡から西側に延びる丘陵先端部に築かれていた二階櫓跡の南側山裾の平坦部に位置し、標高は約4.8mを計る。絵図史料によると、武家屋敷の一角で間違構造の存在が予想された。調査は、重機と人力により1箇所のト



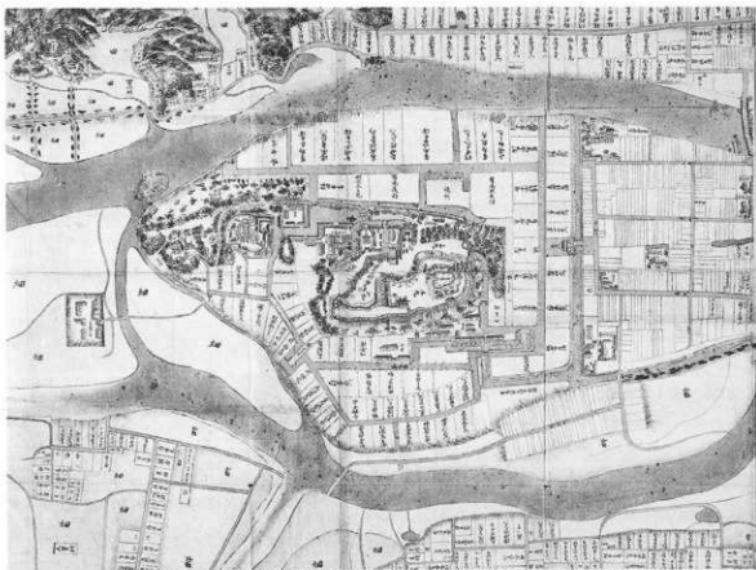
Fig. 7 延岡城内遺跡(第19次)調査区位置図  
(1/15,000)



Fig. 8 延岡城内遺跡(第19次)調査区配置図  
(1/2,500)



PL. 5 延岡城内遺跡(第19次)近景(南西から)



PL. 6 有馬家中延岡城下屋敷付絵図(部分・17世紀後半)明治大学博物館蔵



PL. 7 延岡城下図屏風(部分・17世紀末)個人蔵

L=5.200m

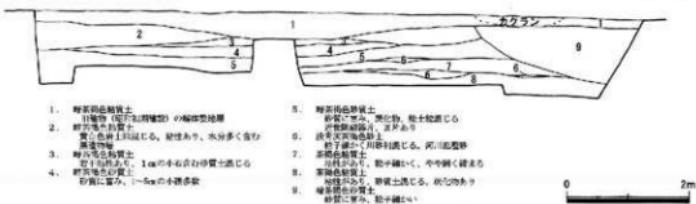


Fig. 9 延岡城内遺跡(第19次)土層断面図(1/80)



PL. 8 延岡城内遺跡(第19次)土層断面・遺物出土状況(北西から)

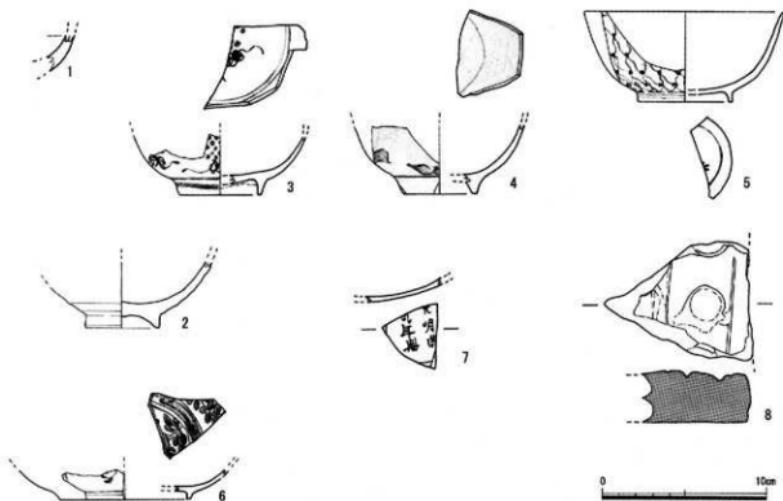


Fig. 10 延岡城内遺跡(第19次)出土物実測図(1/3)

レンチを設定して行った。

調査の結果、以前建てられていた木造家屋（昭和初期建設）の解体整地層から近世陶磁片が出土したもの、トレンチの南側（道路側）を中心に河川氾濫に起因するとみられる均質な砂質土等が確認され、遺構検出には至らなかった。一方、トレンチ北端部の地表下約1.2mから焼土・炭化物を検出し、当初は天和2年（1682）頃の三階櫓や武家屋敷が焼失した延岡城大火の影響と思われたが、放射性炭素年代測定の結果、15世紀中～後半の築城以前に相当することが判明した。

#### (3) 検出遺構

なし

#### (4) 出土遺物

トレンチから、近世の肥前産の陶磁器片及び瓦片などが出土した。各遺物の詳細については、別表に記載しておく。

#### (5) まとめ

今回の確認調査では、詳細不明であった延岡城内における桜小路地区の様相解明に繋がる成果が期待されたが、関連遺構の検出には至らなかった。しかしながら、同地区では緩やかな再開発事業の展開が予想されることから、引き続き開発事業に留意する必要があるろう。

遺物 番号	種別	器種	出土地点	層位	法量		形態及び文様	備考
					口径・長さ	裏後・幅		
1 瓶器	青磁碗	1トレンチ	5層					
2 勺器	碗	1トレンチ	解体整地層		4.6		焼成不良 外面輪はじき 内外面に深い貫入 叠付 け露胎	肥前 17C
3 瓶器	染付碗	1トレンチ	3層		5.0		内外面葡萄文 見込み二重圓線 高台内面圓線有	肥前 18~19C
4 瓶器	染付碗	1トレンチ	8層		4.6		焼成やや不良 外面模様 内外面貫入 外面底部圓 線あり、見込み圓線あり	肥前 17C
5 瓶器	染付碗	1トレンチ	解体整地層	12.2	5.8	5.5	外圓に網目文、高台外圓二重圓線、高台内面に圓線 あり、「口」銘款	肥前 18~19C
6 瓶器	染付瓶	1トレンチ	解体整地層				内面牡丹文、高台外圓二重圓線	肥前 17~18C
7 瓶器	染付瓶	1トレンチ	解体整地層				高台内面圓線あり、「大明洪武年製」銘款	肥前 18~19C
8 瓦	鬼瓦?	1トレンチ				3.1		

第2表 延岡城内遺跡(第19次)出土遺物観察表



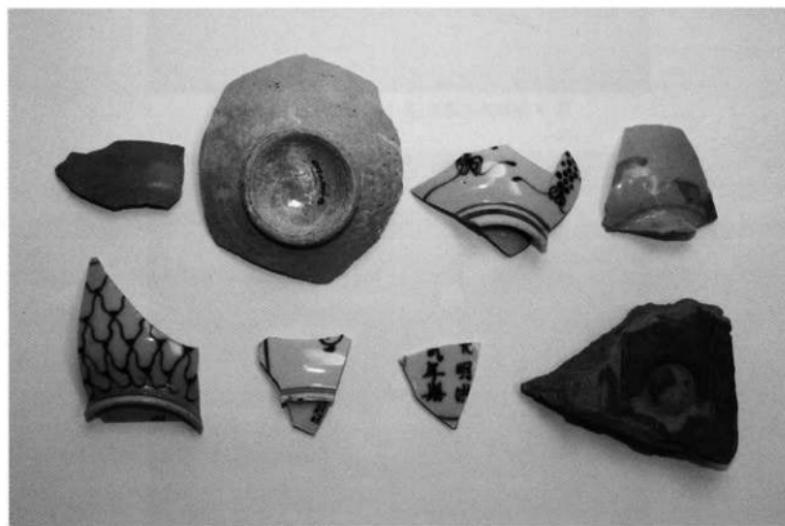
PL. 9 延岡城内遺跡(第19次)調査状況(北から)



PL. 10 延岡城内遺跡(第19次)調査状況2(南から)



PL. 11 延岡城内遺跡(第19次)遺物・炭化物等出土状況



PL. 12 延岡城内遺跡(第19次)出土遺物

### 3. 延岡城内遺跡（第20次）

所在 地 延岡市天神小路 310-25

調査 原 因 個人住宅建設

調査 期 間 20090312

調査面積 5.0 m<sup>2</sup>

担 当 者 山田

處 置 懇重工事

#### （1）位置と環境

延岡（縣）城は、慶長8年(1603)に初代延岡藩主高橋元種によって築城されたもので、五ヶ瀬川下流域に形成された延岡平野の中州（川中地区）にある独立丘陵上に所在する。河川の下流側となる城の東側には中洲の微高地が広がり、一帯には北町、中町、南町の城下町や水運を利用した船倉（舟入）が整備された。元種後に入封した有馬氏は柳沢町を整備し、川北地区の元町、紺屋町、博労町と併せていわゆる延岡七町が完成した。後に記された「延陵世鑑」によると、北町は東西百三十八間、道幅一間半、中町は東西二百二十九間、道幅二間、南町は東西百三十一間、道幅三間、各々に道幅一間の横町があったとされる。また、町屋と城内との境には五ヶ瀬川から南北方向に直交する外堀（大正末期に埋立て）が造られ、妙專寺付近から西に折れて延岡城南櫓の米蔵・武具蔵（城山公園南駐車場付近）まで続き、船藏に通じる堀（本町通・大正期は堀川通りと呼ばれた）とともに主要な物資輸送ルートとして利用されていた。また、外堀中央部付近には、城内への玄関口となる城下最大規模となる京口門が整備され、入口の外堀上には京口橋が架かり、当時の活気溢れる城下町の情景が「延岡城下図屏風」（市指定有形文化財）に描かれている。この他、各町内の要所には寺院が配置され、北町に白道寺（現三福寺）、中町に誓敬寺、照源寺、南町に専念寺、妙專寺、光勝寺、本善寺（廃寺）があり、城下町の経済活動活性化とともに、寺の空間を活用した戦時における駐屯機能確保や防災機能強化を狙ったものと考えられている。



Fig. 11 延岡城内遺跡(第20次)調査区位置図  
(1/15,000)



Fig. 12 延岡城内遺跡(第20次)調査区配置図  
(1/2,500)



PL. 13 延岡城内遺跡(第20次)近景(南西から)

## (2) 調査の概要

今回の調査地は、延岡城二ノ丸南側の高台（二階門跡西側）にあった角櫓（二階櫓）の西側約150m、標高約5.0mの地点にあたる。絵図史料によると、付近は武家屋敷で構成され、大瀬川に並行する桜馬場（現桜小路）が西之丸（歴代藩主の屋敷・内藤記念館付近）に向かって北西方向に屈折した道筋にあたる。この道筋の約100m南東側には、西之丸に対する防衛措置として大きくクランク状になった通路が残っている。調査は、重機と人力により1箇所のトレーンチを設定して実施した。

調査の結果、解体整地層から若干の近世陶磁器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

## (3) 検出遺構

なし

## (4) 出土遺物

少量の近世陶磁器片が出土した。各遺物の詳細については、別表に記載しておく。

## (5)まとめ

今回の確認調査では、近世遺構は確認されず、先に実施した延岡城内遺跡（第19次）と同様の層序が確認された。周辺地域では戦後に建築された住宅の更新時期にもなっていることから、引き続き周辺地域の開発に留意する必要があろう。

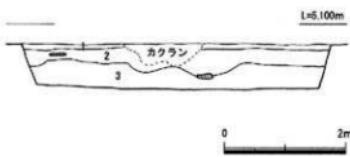
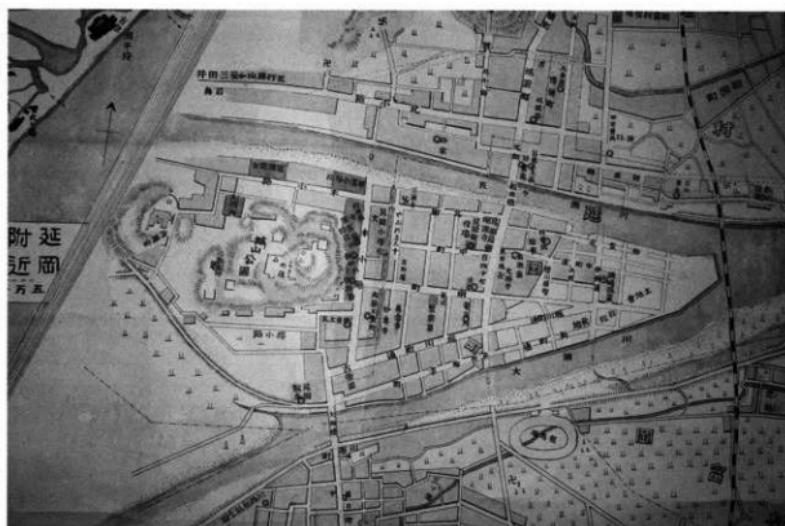


Fig. 13 延岡城内遺跡(第20次)土層断面図(1/80)

1. 構造物等の埋蔵土  
ガラス片、タッカシーラン少量混じる  
旧市物織代瓦等混入
2. 構造物等の埋蔵土  
セメントモルト片、3層多く深じら  
現穴内瓦等混入
3. 線状の構造物等  
砂利を伴ひ、軟質土質じる  
供給物の埋蔵している



PL. 14 延岡城内遺跡(第20次)土層断面(南西から)



PL. 15 延岡市街地図(原図は大正12年・昭和39年拡大模写図)内藤記念館蔵



PL. 16 延岡市街地空撮(昭和23年・GHQ撮影)

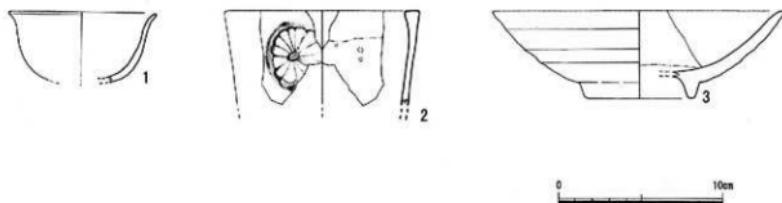


Fig. 14 延岡城内遺跡(第20次)出土物実測図(1/3)

造物 番号	種別	器種	出土地点	層位	法量			形態及び文様	備考
					口径・高	底径・幅	壁厚・深		
1	磁器	碗	1トレンチ	2層一括	9.0			端反碗 内外面貫入 底部露胎	古城焼 19C
2	磁器	火入	1トレンチ	2層一括	12.0			外面菊花文	
3	陶器	皿	1トレンチ	2層一括	18.0	7.4	5.3	見込み釉はぎ 内面波状文 底部露胎	肥前 18~19C

第3表 延岡城内遺跡(第20次)出土物観察表



PL. 17 延岡城内遺跡(第20次)調査状況1(北から)



PL. 18 延岡城内遺跡(第20次)調査状況2(南から)



PL. 19 延岡城内遺跡(第20次)出土遺物

## 4. 南久保山第1地点

所在地 延岡市北方町南久保山子 3325-2,3 外  
調査原因 市道改良  
調査期間 20090218～20090220

調査面積 6.0 m<sup>2</sup>  
担当者 小野  
位置 工事実施

### (1)位置と環境

五ヶ瀬川の北側の台地上に位置する。五ヶ瀬川との比高差は60m程である。

東側には旧石器時代～中世の遺跡である南久保山小堀町遺跡が、南側には東原遺跡が所在する。

当地に市道改良工事計画が予定され、遺跡の所在が予想されたため確認調査を実施した。

### (2)調査の概要

調査は、市道の拡幅部分に6ヶ所のトレンチを設定して実施した。

調査の結果、遺物包含層は検出されなかった。表土を除去すると、地山が検出された。地山に掘り込まれた柱穴を確認したが、ガラス片等の混入が見られた。

埋土中より、チャート製の剥片等が出土している。

### (3)検出遺構

なし

### (4)出土遺物

チャート製剥片、砂岩製剥片、敲打器

### (5)まとめ

今回の調査では、遺構は検出されなかつたが、周辺には包含層が削平を免れて残っている可能性があり、今後も引き続き諸開発事業に留意する必要がある。

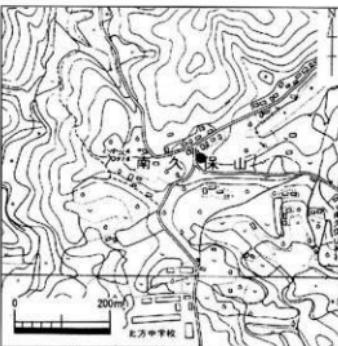


Fig. 15 南久保山第1地点調査区位置図(1/10,000)

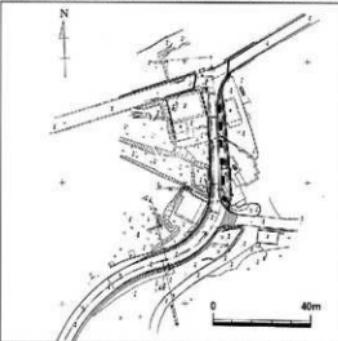


Fig. 16 南久保山第1地点調査区配置図(1/2,000)



PL. 20 南久保山第1地点 調査状況(南東から)

## 5. 北久保山遺跡（第1次）

所在地 延岡市北方町北久保山子 3879 外  
調査原因 市道改良  
調査期間 20090223～20090302

調査面積 22.0 m<sup>2</sup>  
担当者 小野  
処置 本調査

### (1)位置と環境

五ヶ瀬川の支流である曾木川の南側、標高 60m 程の台地上に位置する。東側には中世山城である仲畠城跡、曾木川を挟んで縄文時代後期・晚期の遺物が出土している仲畠遺跡が所在する。

当地に市道改良工事計画が予定され、遺跡の所在が予想されたため、確認調査を実施した。

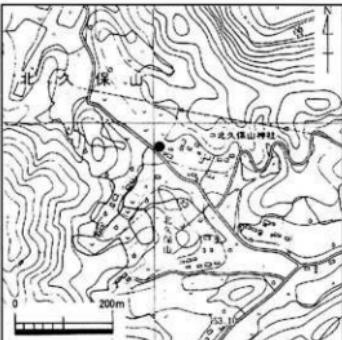


Fig. 17 北久保山遺跡(第1次)調査区位置図(1/10,000)

### (2)調査の概要

調査は、市道の拡幅部分にトレーナーを設定して実施した。

調査の結果、大部分は土地山まで削平されていたが、北西側ではアカホヤ火山灰層が良好に残り、縄文時代早期及び旧石器時代の包含層が確認された。また、アカホヤ層上面から掘り込まれた土坑を 1 基検出した。



Fig. 18 北久保山遺跡(第1次)調査区配置図(1/2,000)

### (3)検出遺構

土坑 1 基

### (4)出土遺物

旧石器時代剥片、縄文土器、打製石斧、剥片  
弥生土器、土錐

### (5)まとめ

今回の調査では、竪穴住居などは検出されなかったが、各時代の遺物が確認されている。

平成 21 年度に本調査を実施した。



PL. 21 北久保山遺跡(第1次)調査状況(北西から)

## 6. 東原遺跡（第5次）

所在地 延岡市北方町川水流卯 967-6  
調査原因 市道改良工事  
調査期間 20090317～20090319

調査面積 7.0 m<sup>2</sup>  
担当者 小野  
処置 本調査

### (1)位置と環境

五ヶ瀬川に向かって南へ緩やかに傾斜する台地上に位置する。五ヶ瀬川との比高差は、50m程である。

北方中学校の校地内にあたり、以前から埋蔵文化財宝蔵地として知られている。

当地に市道改良工事計画が予定され、遺跡の所在が予想されたため確認調査を実施した。

### (2)調査の概要

調査は、工事により影響を受ける部分を中心にトレチを設定して実施した。

市道拡幅部分のごく狭い範囲が調査対象地であり、大部分が地山まで削平されていた。

調査の結果、南端のトレチで縄文時代早期及び旧石器時代の良好な包含層が確認された。

遺構は検出されなかったが、旧石器時代の流紋岩製の剥片、縄文時代早期の土器・石器、弥生土器が出土した。焼けた礫も多く、集石遺構の所在も予想される。

### (3)検出遺構

なし

### (4)出土遺物

旧石器時代剥片、縄文土器・石器、弥生土器

### (5)まとめ

今回の調査では、堅穴住居跡は検出されなかったが、出土遺物からその存在が予想される。

平成21年度に本調査を実施した。



Fig. 19 東原遺跡(第5次)調査区位置図(1/10,000)

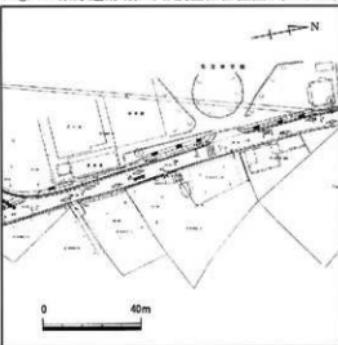


Fig. 20 東原遺跡(第5次)調査区配置図(1/2,000)



PL. 22 東原遺跡(第5次)調査状況(北西から)

## 7. 東原遺跡（第6次）

所在地 延岡市北方町川水流卯 963-5, 7  
調査原因 個人住宅建設  
調査期間 20090309~20090310

調査面積 14.0 m<sup>2</sup>  
担当者 小野  
処置 工事実施

### (1)位置と環境

五ヶ瀬川に向かって南へ緩やかに傾斜する台地上に位置する。五ヶ瀬川との比高差は、50m程である。

周辺地域では、以前から土器や石器が採集されている。

当地に、住宅建設が予定され、遺跡の所在が予想されたため、確認調査を実施した。

### (2)調査の概要

調査は、建物等により影響を受ける部分を中心 にトレンチを設定して実施した。

調査の結果、一部アカホヤ層が確認されたが、 遺構・遺物の検出はなかった。

### (3)検出遺構

なし

### (4)出土遺物

なし

### (5)まとめ

今回の調査では、遺構・遺物は検出されなかつたが、周辺には旧石器～中世の遺跡が確認されている。今後も引き続き諸開発事業に留意する必要がある。

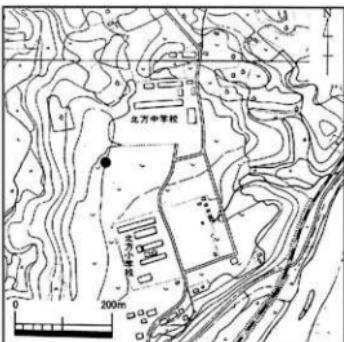


Fig. 21 東原遺跡(第6次)調査区位置図(1/10,000)



Fig. 22 東原遺跡(第6次)調査区配置図(1/2,500)



PL. 23 東原遺跡(第6次)調査状況(南西から)

## 8. 日の出町1丁目角原地点

所在地 延岡市日の出町1丁目9-10  
調査原因 個人住宅建設  
調査期間 20090430～20090501

調査面積 5.0 m<sup>2</sup>  
担当者 甲斐  
処置 慎重工事

### (1)位置と環境

調査地点が所在する日の出町は、日向灘に注ぐ五ヶ瀬川と祝子川の合流地点の西側に位置し、地形的には川沿いの自然堤防に囲まれた後背湿地である。一帯は昭和37年から行われた区画整理地域であり、それ以前は水田・耕作地帯であった。

調査地点付近では、これまでに2度発掘調査が行われ、弥生時代の遺物が確認されている。

### (2)調査の概要

調査地点の標高は約4.2mである。調査はトレンチを1箇所設定し、人力による掘削を行った。表層は厚さ約60cmの造成土であり、2層目はマンガンを多く含む灰黄褐色・褐色土であった。時期は不明であるが、宅地になる前は畑であったと考えられる。地表下約100cmで黒褐色粘質土層に達した。珪片は確認できなかったが、水田層と考えられる。遺物の出土はなく、時期を判断できなかった。最終的に地表下170cmまで掘り下げ、明黄褐色粘質シルト層に達したところで調査を終えた。

### (3)検出遺構

なし

### (4)出土遺物

弥生時代終末～古墳時代初頭土器・中世土師皿  
(いずれも客土内出土)

### (5)まとめ

今回の調査では明確な遺構等を確認できなかつたが、付近の開発には今後も注意を払う必要がある。



Fig. 23 日ノ出町1丁目角原地点調査区位置図  
(1/15,000)



Fig. 24 日ノ出町1丁目角原地点調査区配置図  
(1/2,500)



PL. 24 日ノ出町1丁目角原地点調査状況(南西から)

## 9. 上多々良遺跡（第12次）

所 在 地 延岡市古川町430  
調査原因 遺跡発見(区画整理)  
調査期間 2009.05.18～2009.06.09

調査面積 1,400 m<sup>2</sup>  
担当者 尾方  
処置 慎重工事

### (1) 位置と環境

延岡市の中心部を流れる五ヶ瀬川は、市の中心を西から東に貫流する。市街地の中心から南西に約4kmの地点で大瀬川と分かれ、大きく北に流れを変える。そして、市街地の中心から東に約1kmの地点で再び大瀬川と合流する。市街地の中心部は、この二つの河川によって形成される中洲上に営まれている。

上多々良遺跡の所在する岡富町・古川町は、五ヶ瀬川を挟み、市街地の中心の北西の対岸、五ヶ瀬川左岸に広がる。岡富山から派生する丘陵地帯と、五ヶ瀬川の後背湿地帯に営まれている水田地帯が広がる。五ヶ瀬川の氾濫により、古くから水害に見舞われる地区であった。また、岡富山と五ヶ瀬川に挟まれた細長い土地に、住宅が密集しており、道路も狭く緊急車両の通行も困難な地区であった。災害に対応し、住環境の改善を目的とし、平成9(1997)年に岡富古川土地区画整理事業が計画された。また、それに伴い国道218号線の改良工事、仮称岡富橋の架設事業、延岡西環状線の道路網整備等の上位計画も併行して計画・事業化され、現在、一大公共事業が進捗する地区となっている。

調査地周辺は古川古墳、宮崎県指定史跡延岡古墳群第34号墳(指定解除)等が分布し、古くから埋蔵文化財の包蔵地としても知られていた。

古川古墳は、上多々良遺跡(第12次)の調査地点が所在する水田地帯の北西側の低い丘陵上に所在していた古墳である。1968(昭和43)年の宅地造成工事の際に、墳丘が削平され出土したようである。市の担当者が連絡を受け、現地に急行したがすでに主体部は破壊され、石棺と遺物



Fig. 25 上多々良遺跡(第12次)調査区位置図  
(1/15,000)



Fig. 26 上多々良遺跡(第12次)調査区配置図  
(1/5,000)

の一部が地権者宅に運び込まれていた。石棺は阿蘇溶結凝灰岩製の舟形石棺で、内部には全面に赤色顔料が塗られていたようである。遺物は革縫短甲の押付板、直刀、刀柄部、鉄剣、鉄鎌等が收集されている。出土した鉄鎌の中には長さが約19cmもある非常に大型で特異な形状を持つ鉄鎌も含まれている。

延岡古墳群第34号墳は横穴であったが、遺存しておらず指定解除になっている。また、岡富山では組合式石棺から刀、硝子小玉1が出土しており、延岡古墳群第6号墳として指定されていた。しかし、公園墓地造成の際に所在が不明なまま指定解除になっている。

また岡富山から南に派生する丘陵裾、上多々良遺跡（第12次）の西方約500mには、古川窯跡が所在する。2基の登り窯が山の斜面を利用して南北に築かれている。1940(昭和15)年に調査が行われており、1号窯は二段築成で焚口の端から上方の煙出しの端まで総長約10.3m、幅は最大で1.2m、両壁および天井部は粘土と藁を混せて形を作り、その内側を粘土で塗り固めていた。焚口底部から最上部底部の比高差は3.7mを測る。底部の延長は10.7mで、焚口端から4.75mの地点で二段目平坦部に接続する。1号窯より半焼成の須恵器が多数発見されている。2号窯は1号窯の南側に平行して位置している。底部の延長は4.55mを測る。報告では、窯の操業は奈良時代とされている。遺物は消失しているが、近年の検証では操業時期が古墳時代まで遡ると考えられている。

このように古墳時代の遺跡が、数多く分布する地域である。地域的な特徴としては、石棺の石材に阿蘇溶結凝灰岩を使用する地域と千枚岩を使用する地域の分岐点と呼べる地域である。特に今回、調査を行った上多々良遺跡は、千枚岩を使用する集団としては最も南かつ最も西に位置する古墳群で、阿蘇溶結凝灰岩を使用している古川古墳と1kmと離れていない立地であり、非常に興味深い。



PL.25 上多々良遺跡（第12次）空中写真撮影

このように多くの遺跡が所在する地域であり、土地区画整理事業の計画があがつた、平成9年から延岡市教育委員会は、計画地内の試掘・確認調査を実施し、多くの埋蔵文化財の所在を確認してきた。岡富古川土地区画整理事業は平成17(2005)年度に都市計画決定され、事業が本格的に開始された。事業化以前から市教育委員会と市区画整理課との間で、試掘・確認調査の結果含め埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねたが、災害対策を優先し、上位計画との整合性等を考慮した結果、計画の変更は困難であるという結論に達していた。そこで、やむなく記録保存を行うこととなり、埋蔵文化財の本調査が開始された。

岡富古川土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の調査は、試掘・確認調査及び本調査を含め今回で12次を数える。同区画整理事業に伴う本発掘調査は平成17年度から平成21年度にかけて実施された。これまでの調査で五ヶ瀬川に向かって派生する舌状丘陵上から、前方後円墳1基、円墳11基、不定形墳1基、箱式石棺墓4基を中心古墳時代の遺構・遺物が多数出土している。また、古代の火葬人骨を納めた藏骨器埋納遺構や墨書き土器等、非常に興味深い遺構・遺物が出土している。現在は資料整理を行っている段階で、その詳細については報告を待つこととなるが、ここに概略を記載したい。

平成17年度の第3次調査では、3基の円墳を調査している。高千穂鉄道から南に延びる丘陵に立地しており調査の便宜上北からA・B・C号墳としている。

A号墳 直径約16.5mの円墳で主体部は木棺直葬であった。一部電柱による破壊を受けていたが、鐵劍、堅櫛が出土している。

B号墳 直径約18.5mの円墳で2箇所の埋葬部を持っていたと思われるが、1箇所は盗掘による破壊を受けていた。墳丘には葺石が伴っていた。残存していた1カ所の主体部は、礎床に木棺を配置しその周囲を疊で覆った構造になっていた。遺物は鐵片のみで形状は不明である。

C号墳 直径約18.5mの円墳で、規模・古墳構造・主体部構造とともにB号墳と同様である。しかしながら主体部は電柱の破壊をうけており、遺物は出土していない。墳丘より鐵斧が出土している。

平成18年度は3・2次として南丘陵上を調査している。ここは調査丘陵において最南端にあたるとともに最高位を測る。五ヶ瀬川に向かって最も眺めのよい地点になる。調査から3基の円墳、箱式石棺2基、藏骨器舞納遺構2基、祭祀遺構（墨書き土器）、不明土壙が検出されている。便宜上北からD・E・F・G・H号墳としている。

D号墳 直径約13mの低墳丘の円墳で主体部は木棺直葬であった。浅い周溝が巡っている。主体部から鐵劍が出土している。

E号墳 直径約9.5mの低墳丘の円墳で主体部は箱式石棺であった。平成9年の確認調査で主体部を調査しており、鉄鏃1本が出土している。E号墳同様浅い周溝が巡っている。

F号墳 箱式石棺である。地山を掘込み長辺に緑色岩を立て並べ、やはり緑色岩にて蓋をしていた。遺物は出土していない。

G号墳 丘陵の最高位に築造された直径約11mの円墳で、主体部は木棺である。遺物は出土していない。

H号墳 箱式石棺である。地山を掘込み長辺一方に砂岩を立て、やはり砂岩1枚岩にて蓋をしていた。遺物は出土していない。非常に小型であった。

これらの古墳に混じり、平安時代前期の蔵骨器埋納遺構2基が検出されている。1基は単体の須恵器壺に蓋がなされ、男性の焼骨が納められていた。土師器壺1が共伴している。もう1基は5つの須恵器が埋納されており、2つの壺から男性と性別不明の焼骨が確認されている。3つの須恵器は共伴遺物である。また、同時期の祭祀遺構が確認されており、土師器壺7枚が一部重ねられた状態で裏返しに埋納されており、うち4枚から「左」の墨書が確認された。平安時代の蔵骨器の出土は県内でも珍しく、古代「県（あがた）」の郡衙の位置を探る、考古学的なアプローチとして極めて重要な遺構及び遺物である。

平成20(2008)年には第8次調査として、第3次調査の丘陵の東側の水田地帯を隔てた舌状丘陵の先端部の調査を行っている。平成9年の第1次調査で確認されていた古墳の本調査であり、調査の結果、円墳であることが確認され、便宜上I号墳としている。

I号墳 直径約19mの円墳で、墳丘は削平を受けていたが一部に葺石が残る。主体部は木棺である。遺物は鉄剣1、鉄斧1、堅櫛4が出土している。

また、平成21(2009)年の第11次調査では、更に前方後円墳や不定形墳等が検出されており、非常にバラエティーに富む古墳群の様相を呈している。上多々良遺跡は古墳時代中期墳から古墳時代後期にかけて、尾根上に連続して古墳が築造されている。このような古墳群の分布は、宮崎県北地域では珍しい。周辺でも多くの古墳時代に関係する遺跡が確認されているが、集落遺跡や生産遺跡の確認がなされていないのが現状であり、今後の一つの課題であろう。この他に、平安時代前期の蔵骨器の出土は県内でも珍しく、極めて貴重な資料を提供することとなった。

## (2) 調査の概要

今回の調査地点は、区画整理事業が着手され水田地帯の表土の剥ぎ取り中に、表土下から土器等が出土し、不時発見された遺跡である。平成21(2009)年5月11日付延区第12号により、延岡市長より遺跡発見の通知があり、平成21年5月18日に調査に着手した。近接する水田は、平成16(2004)年の第2次調査の際に調査を行っており、その際には遺物・遺構等は検出されていなかった。

調査地は表土剥ぎが途中まで行われており、改めて重機を使って表土を剥ぐことから始めた。表土内にも土器片が見られる状況であった。表土剥ぎ取り後、遺構検出を行ったが検出されなかつた。その後、全体的な堆積状況を確認するために、調査区の西端、中央部、東に各1箇所づつ計3箇所のトレンチを設定した。トレンチはそれぞれ西からトレンチ1、トレンチ2、トレンチ3とした。各トレンチともに表土除去後の地表から、70cm前後で湧水層にあたつた。湧水までの土も非常に多く水分を含んでおり、トレンチ掘削直後は、徐々に孕んでくるほどであった。調査地の基本層序は以下のとおりである。

第1層 灰褐色粘質土（旧耕作土） 重機で部分的に除去しており、層厚10cm～20cmである。

第2層 暗橙色粘質土（水田基盤層） 層厚は概ね10cmを測る。

第3層 暗褐色粘質土（マンガン斑が多く見られる） 層厚は20cm～30cmである。

遺物包含層である。

第4層 淡黄灰色粘質土、部分的に無くなる層である。層厚は15cm前後である。

第5層 淡黄褐色粘質土、層厚は20cm～30cmを測る。

第6層 淡青灰褐色粘質土（砂が多く混じる） この層の下位から湧水が見られる。

遺物は概ね第3層に見られ、その下層の4層からも出土する。同一層内に見られる遺物は非常に時期差のある出土となっている。

## (3) 検出遺構

調査地の土はすぐに乾燥し、乾燥すると非常に硬くなり白化する。また、雨などで濡れると非常に軟らかくなり、水田の様相を帯びる。そのため、遺構検出が非常に困難であった。その中でも数回の全面的な遺構検出を行うが、遺構として捉えうるもののがなかつた。

ただし、出土する土器に一定の集中部が見られた。その一つはトレンチ3の北端の西側付近に1箇所（A地点）で、さらにトレンチ3の南端の西側に1箇所（B地点）の計2箇所である。土器集中部の土器は時期差があるものが同一層内に見られる出土であった。

また、トレンチ2の南端の西側に直径約1.3m 不定形な円形の焼土の集中がみられた。この3箇所を中心に徹底して、遺構検出をするも明確な掘り込みやピットは確認できなかつた。焼土集中部からは高壙の脚部等が出土しているが、特にガラス製小玉が集中して20個以上出土している。

#### (4) 出土遺物 (Fig. 27~29)

今回の調査では、多くの土器が出土している。ここにその一部を掲載する。

1~11は表採や土器集中部でない場所から出土している遺物である [P31 Fig. 27 上多々良遺跡 (第12次) 出土遺物実測図①]。1は甕の口縁部でトレンチ3の3層より出土している。外面に刻み目突帯文が巡り、口唇部にも刻み目がある、外面は丁寧なナデが施されている。弥生時代中~後期の下城式土器の形式である。2は表採遺物で、弥生の甕の底部である。上げ底氣味の平底で底部内面に指押さえ痕が明瞭に残る。胎土は精良である。3も2と同様上げ底氣味の甕の底部である。内外面に指押さえ痕が残る。4・5古墳時代中期の粗製の丸底壺である。4は3層出土の遺物で、5は表採である。6はトレンチ2の3層出土で、高坏の脚柱部である。脚の中央がエンタシス状に膨らんでいる。内面からの粘土の充填が見られる。7は口径が14.1cmを測る壺で、風化が激しいが微妙かに顔料が付着しているように見える。8は表採された須恵器の蓋壺の蓋でほぼ完形である。陶邑の田辺編年のMT85 形式相当と判断される。9はトレンチ3の3層より出土している。TK217~TK46 形式相当の小形の蓋壺の蓋である。ほぼ完形でツマミ部にゆがみがある。10は須恵器の壺で、口縁部が単純な作りとなっている9と同時期と判断される。11は口径が23cmある平底の鉢である。

12~21 [P32 Fig. 28 上多々良遺跡 (第12次) 出土遺物実測図②] は土器集中部△地点周辺出土の遺物である。

12は胴部に屈曲を持つ粗製の丸底壺である。外面の胴部の張り出し部に集中してススが付着している。13は高坏杯部で、外面に稜を持ち、そこから八の字状に外反する。中央に充填された粘土が残る。14は手捏ね土器の底部である。指押さえの跡が明瞭に残る。15は高坏脚柱部である。本遺跡では、比較的多くの高坏が出土しているが、15のように比較的直線的立ち上がるタイプと、16のようにエンタシス状の脚柱部を持つ2つのタイプに分類可能である。17は安国寺系の壺である。口縁の立ち上がりが不明であるため、時期については判断ができなかった。頸部に刻み目突帯文が貼り付けてある。18、19は壺の口縁部で、口縁部が直線的に立ち上がり、頸部が短く、山陰系の壺の要素が強く伺える。20は須恵器の坏身で、立ち上がりが短くTK209形式の前後に相当すると考えられる。21は古代の土師器の坏で底部はへら切りで、外面に一部顔料が残る。

22~31は [P33 Fig. 29 上多々良遺跡 (第12次) 出土遺物実測図③] [P34 Fig. 29 上多々良遺跡 (第12次) 出土遺物実測図④] 土器集中部B地点周辺出土の遺物である。

22は高坏杯部で、口縁部をぐるりと指で押されたような段がついている。外面の屈曲部に明瞭な稜を持つ。内外面ともにススの付着が見られる。23も高坏杯部で内外面ともに丁寧なミガキが見られる。明瞭な屈曲部を持ち、立ち上がる古墳時代の前期の要素を持っている。24は高坏の脚柱部で、15のタイプである。25は平底の土師器底部である。26は底部が平底状を呈す甕である。頸部内面の屈曲が明瞭である。外面の胴部が張り出し付近に、集中してススが付着し、内面は底部付近にススが付着している。タタキ痕をナデにより消している。27も甕である。底部は丸底を呈する。頸部内面の屈曲が明瞭である。27と同様に、外面は胴部が張り出す付近を中心にススが付着し、内面は底部付近にススが付着している。粘土紐の接合痕が残っている。26、27ともに古墳時代中期前半に位置づけられる。28は小型の甕で、粘土紐の痕跡が後となって観察できる。口縁部はやや内湾しながらも、ほぼ垂直に立ち上がっていく。29は安国寺系の甕の口縁部で、外面頸部に刻み目突帯文が

貼り付けてある。口縁部の内外面ともに、比較的丁寧なナデが行われている。30は須恵器の蓋坏の蓋で、直径が16.6cmと大きく、単純な口縁部である。体部の稜線が不明瞭である。MT85形式に相当すると考えられる。31は古代の土器器の坏で底部はへら切りである。

32の高坏脚柱部は焼土集中部からの出土である。15や24と同様のタイプである。

上多々良遺跡（第12次）調査では、26個の玉類が出土している。1は蛇紋岩製の管玉である。土器集中部B地点の近くから出土している。2～26は小玉である。2のみ土器集中部A地点近くから出土している。それ以外の24個の小玉は全て焼土集中部及びその周辺から出土している。4・7・10はガラス製小玉で、鮮やかな青色をしている。丸みを持った比較的大きな作りである。その他の玉は石製で滑石と思われる。小さく薄く扁平な作りである。

#### （5）まとめ

今回の調査は不時発見で始まっている。近接している地区については試掘を行っており、試掘調査の結果から、区画整理事業に支障無しと判断した地域であった。局地的な集中があつたための結果と思われるが、今後、周辺地域を調査を行う際には留意する必要がある結果となった。

今回の調査では、焼土集中部に小玉の集中が重なったが、廃棄された住居址等とも考えられた。精査を行ったが、掘り込みや柱穴を確認することは出来なかつた。包含層に含まれる遺物も、弥生時代～古代と幅広かつた。しかし、完形に近い土器や、摩滅している土器片が少ないとから、付近に何らかの生活拠点があったことは充分に予想される。ただし、今回の調査地は常に水を含むような土地であり、日常的に生活するのに適している土地とは言い難い堆積状況であった。

今回の調査では、明確な遺構、文化層を確認することは出来なかつた。出土した遺物の時代観は、丘陵上に展開する古墳群や、藏骨器埋納遺構等の時期と同時期と判断される遺物が多かつた。今後、この付近において、これらの時期の生活遺跡や生産遺跡の所在が明らかになることに期待したい。

最後になりましたが、市区画整理課には、上多々良遺跡（第12次）調査についていろいろと便宜を図っていただき、御協力をいただいた。また、地区的住民の方々にも御理解と御協力をいただいた。記して感謝します。

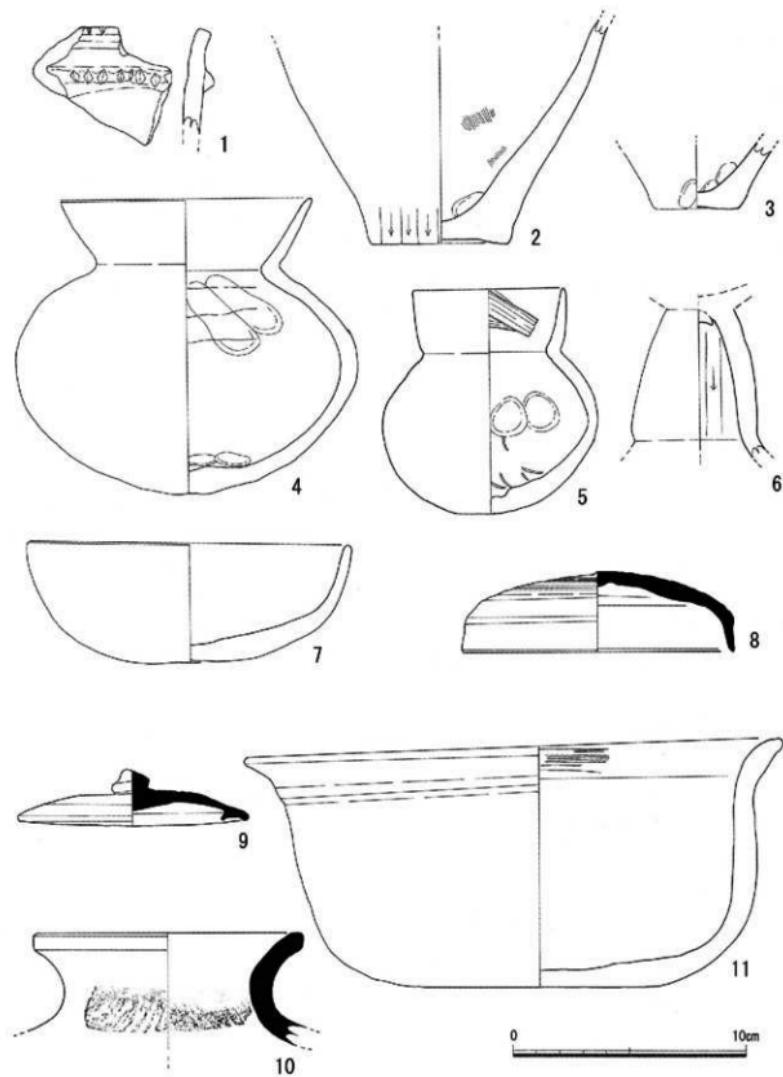


Fig. 27 上多々良遺跡(第12次) 出土遺物実測図①(1/2)

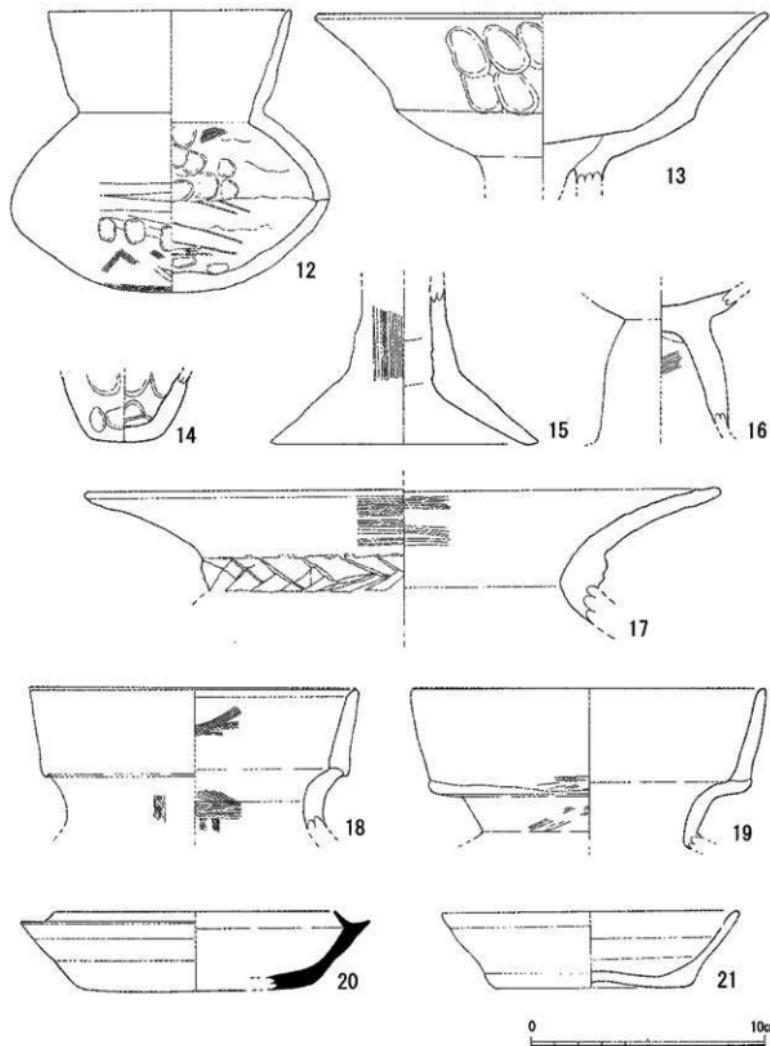


Fig. 28 上多々良遺跡(第12次) 出土遺物実測図②(1/2)

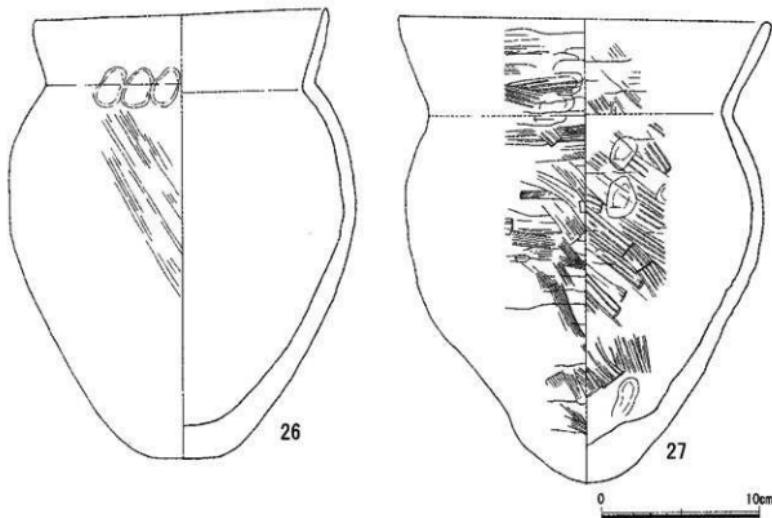
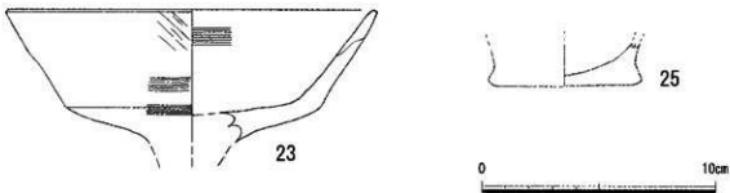
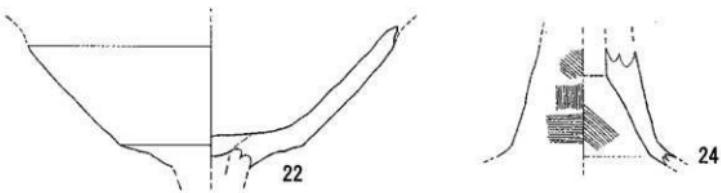


Fig. 29 上多々良遺跡(第12次) 出土遺物実測図③(22~25=1/2 26·27=1/3)

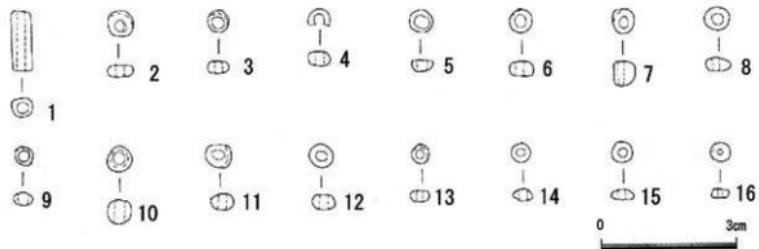
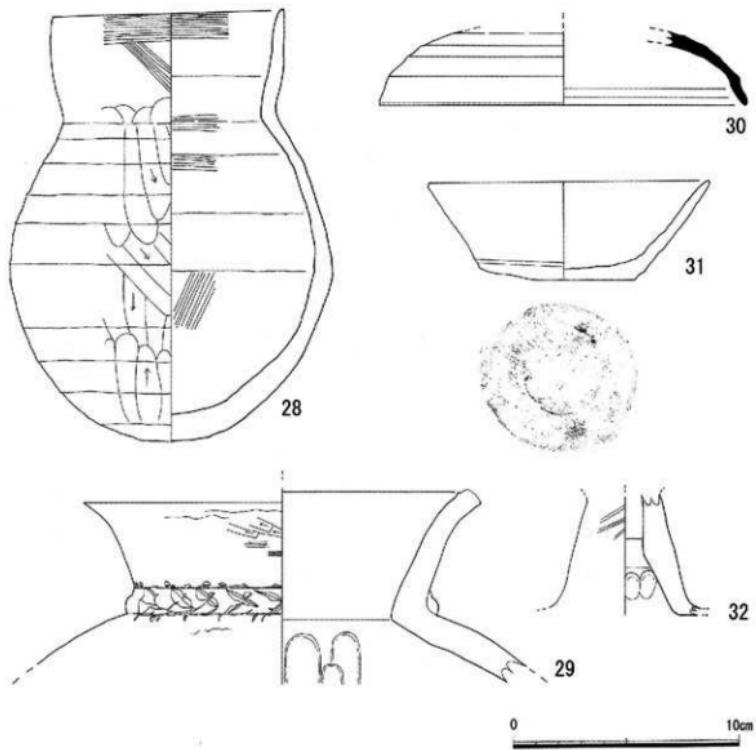


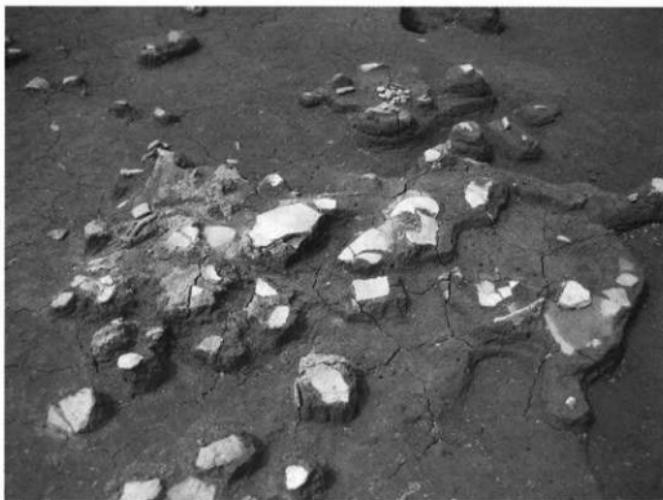
Fig. 30 上多々良遺跡(第12次) 出土遺物実測図④(28~32=1/2 1~16=1/1)

報告番号	種別	器種	出土地点	遺物番号	法量			焼成	色調		備考
					口径・長	底径・幅	高・厚		外面	内面	
1	土器	壺	T3-3	T3-3			6.8	良	暗茶褐色	茶褐色	外側:横ナデ、刻み目突帯文 スス付着 内面:横ナデ
2	土器	壺底部	表探	表探				良	黄橙色	黄橙色	外側:底部ハケ、スス付着 内面:底部指揮され
3	土器	壺底部	164	164			2.8	良	薄い黄橙色	黒っぽい灰色	外側:底部側面に指揮され 内面:指揮され
4	土器	丸底壺	29	29	10.8	1.3	12.9	良	赤褐色	赤褐色	ナデ
5	土器	丸底壺	表探	表探	6.6		9.7	良	淡赤褐色～ 黒灰色	淡赤褐色	横ナデ、指揮され跡
6	土器	高杯脚柱部	T2-3	2-3				良	薄い橙	黄橙色	内面:上部指揮され たてナデ
7	土師器	壺	83	83	14.1			良	赤褐色	淡赤褐色	ミガキと思われるが風化が 著しく不明
8	須恵器	壺	表探	表探	11.65		3.45	良	白灰～黒灰	白灰色	外側:焼成時、灰小片溶着
9	須恵器	壺	T3-3	T3-3	フタ径 10.0	つまみ 1.6		良	白灰色	白灰色	
10	須恵器	壺	1	1	11.6			良	黒灰色	黒灰色	
11	土器	鉢	210	210	23.0	10.8	10.3	やや 不良	橙色	にぶい黄橙色	内面:横ナデ
12	土器	壺	A	109	10.5	2.7	12.1	良	茶褐色	茶褐色	外側:頭部ナデ後指揮され、 底部丁寧なハケ目
13	土器	高杯杯部	A	93	19.4			良	赤褐色	赤褐色、黒灰色	指揮され後ナデ
14	土器		A	71		3.9		良	淡赤褐色	黄褐色	外側:底部に押さえあり 内面:指揮されあり
15	土器	高杯脚柱部	A	68				良	橙色	にぶい橙色	外側:たてのハケメ 内面:つなぎ底有
16	土器	高杯脚柱部	A	45				良	橙色	橙色、上部肌色	内面:横ナデ 上部指揮されあり
17	土器	複合口縁壺	A	42				良	橙色	橙色	
18	土器	複合口縁壺	A	56	15.2			良	茶褐色	黒灰色	横ナデ
19	土器	複合口縁壺	A	109	14.2			良	茶褐色	淡茶褐色	複合口縁、ナデ
20	須恵器	杯身	A	7	12.1			良	白灰色	白灰色	
21	土師器	壺	A	22	12.9	8.0	3.2～3.3	良	淡黄白色	淡黄白色	外、内面ナデ調整有 底部へら切り
22	土器	高杯杯部	B	26	16.4			良	橙色	橙色	内面:スス付着
23	土器	高杯杯部	B	17	16.8			良	黄橙色	黄橙色	外側:口縁斜めナデ杯下 部横ナデ内面:つなぎ底有
24	土器	高杯脚柱部	B	152				良	橙色	灰色	外側:斜めナデ、横ナデ、た てナデ 内面:斜めナデ
25	土器	土師器	B	11		6.6		良	淡橙色	淡橙色	拓本有、底部へら切り1/4 残(底部のみ)
26	土器	壺	B	145/151	18.5		28～28.6	良	赤褐色	赤褐色	外、内面スス付着、ナデ
27	土器	壺	B	150	23.0	9.4	29.5～30.3	やや 不良	黄橙色	赤褐色	内、外側:へラナデ、指揮痕、 つなぎ底 外面:スス付着
28	土器	壺	B	172	10.2	2.2	19.1	良	淡橙色	淡橙色	底部にスス付着
29	土器	二重口縁壺	B	145				良	淡赤褐色	赤褐色	刻み目突帯、ナデ 内面:頸 部横ナデ後強い指揮
30	須恵器	壺	B	10		16.4					外側:取っ手のような後あり
31	土師器	壺	B	11	12.5	6.2	4.4	良	灰白色	灰白色	拓本有、底部へら切り1/2 残
32	土器	高杯脚柱部	燒土	燒土				良	薄い黄橙色	薄い赤褐色	外側:はりつけ痕、横ナデ 内面:指揮され

第4表 上多々良遺跡(第12次)出土遺物観察表

番号	出土地点	材質	器種	法量			重量(g)	色調
				最長(cm)	孔徑(cm)	徑(cm)		
1	14	緑色凝灰岩	管玉	2.3	0.25	0.45	0.36	緑色
2	50	滑石	小玉	0.3	0.2	0.6	0.16	灰緑色
3	125	滑石	小玉	0.3	0.3	0.5	0.13	灰緑色
4	126	ガラス	小玉	0.4	0.2	0.5	0.09	青色
5	127	滑石	小玉		0.35	0.5	0.11	灰緑色
6	128	滑石	小玉	0.35	0.3	0.55	0.14	灰緑色
7	129	ガラス	小玉	0.55	0.25	0.55	0.17	紺色
8	155	滑石	小玉	0.4	0.3	0.6	0.11	灰緑色
9	焼土	滑石	小玉	0.4	0.3	0.25	0.03	黒色
10	焼土	ガラス	小玉	0.55	0.3	0.55	0.13	青色
11	焼土	滑石	小玉	0.5	0.35	0.55	0.12	黒色
12	焼土	滑石	小玉	0.4	0.25	0.5	0.07	黒色
13	焼土	滑石	小玉	0.25	0.2	0.4	0.03	黒色
14	焼土	滑石	小玉	0.25	0.25	0.45	0.01	灰色
15	焼土	滑石	小玉	0.25	0.2	0.45	0.03	白灰色
16	焼土	滑石	小玉	0.2	0.10	0.4	0.06	灰緑色
17	焼土	滑石	小玉	0.25	0.15	0.4	0.01	灰緑色
18	焼土	滑石	小玉	0.15	0.15	0.3	0.01	灰緑色
19	焼土	滑石	小玉	0.15	0.1	0.25	0.02	灰緑色
20	焼土	滑石	小玉	0.2	0.2	0.4	0.03	灰色
21	焼土	滑石	小玉	0.2	0.2	0.4	0.02	黒色
22	焼土	滑石	小玉	0.2	0.2	0.45	0.01	白灰色
23	焼土	滑石	小玉	0.2	0.2	0.4	0.01	黒色
24	焼土	滑石	小玉	0.2	0.2	0.4	0.03	黒色
25	焼土	滑石	小玉	0.15	0.2	0.35	0.01	黒色
26	焼土	滑石	小玉	0.15	0.2	0.4	0.01以下	灰色

第5表 上多々良遺跡(第12次)出土玉類観察表



PL.26 上多々良遺跡(第12次)土器集中部A出土状況



PL.27 上多々良遺跡(第12次)調査前近景(東から)



PL.28 上多々良遺跡(第12次)近景(南から)

## 10. 沖田貝塚

所在地 延岡市小野町口広橋北詰  
調査原因 交差点拡幅工事  
調査期間 20090617

調査面積 7.0 m<sup>2</sup>  
担当者 甲斐  
処置 慎重工事

### (1)位置と環境

本貝塚は愛宕山の南西麓、標高約5.2mに位置し、すぐ南に沖田川が流れている。沖田川流域の地形は埋積谷低地であり、その谷底幅は現在の川幅に比べてかなり広い。沖田貝塚はこれまで大正2年、大正13年、昭和23年の計3回発掘調査が行われ、市指定遺跡となっている。平成4～5年にも西側の隣接地である横谷遺跡が調査され、貝層の広がりが確認されている。

### (2)調査の概要

今回の対象地は指定範囲内であり、以前に貝層が露出していた場所の東側隣接地に当たるため、貝塚の範囲確認を目的として確認調査を行った。

調査の結果、現在の道路を造成した際の岩壁を約80cm掘り下げたところで旧道のアスファルト面が確認された。その下では過去に敷設され、現在も使用されている暗渠状の用水路の天板部分（コンクリート）に当たった。用水路の天板部分は、トレーナー全体にわたって確認された。貝層が確認されるとなればさらにその下部であるが、今回の工事はその深さまで影響は及ばないため、確認作業を終了した。

### (3)検出遺構

なし

### (4)出土遺物

なし

### (5)まとめ

今回の調査では明確な遺構等は確認されなかつた。しかし、付近の開発には今後も注意を払う必要がある。



Fig. 31 沖田貝塚調査区位置図(1/15,000)



Fig. 32 沖田貝塚調査区配置図(1/1250)



PL. 29 沖田貝塚調査状況(東から)

## 1.1. 天下中須遺跡（第1次）

所在 地 延岡市天下町169外

調査原因 市道改良

調査期間 20090721～20090824

調査面積 46 m<sup>2</sup>

担当者 尾方

位置 工事実施

### (1)位置と環境

調査地は、市中心部から西へ約3.4kmの五ヶ瀬川が大瀬川と分岐し北へ大きく湾曲した部分に張り出していく丘陵地帯の北端の付近に位置する。

調査地の約150m北には、国指定史跡南方古墳群第40号墳が分布する。40号墳は現在は独立した丘陵のように見えるが、今回の調査地と一連を成すものであったとも考えられる。また、調査地より南西に約400mに南方古墳群第10号墳が立しているほか、天下城山遺跡（中世城郭）が所在している。



Fig. 33 天下中須遺跡(第1次)調査区位置図  
(1/15,000)

### (2)調査の概要

今回の調査地点は斜面地にあたり、近くに南方古墳群第40号墳である横穴が分布することから、横穴の存在等が予想される立地であった。現況が竹林であったため、まずは竹の伐採から着手した。伐採後、現況で地形に変化が確認される地点、4箇所（最終的には拡張により3箇所）にトレントを設定し、人力で表土を剥ぎ取りながら調査を行った。

### (3)検出遺構

なし

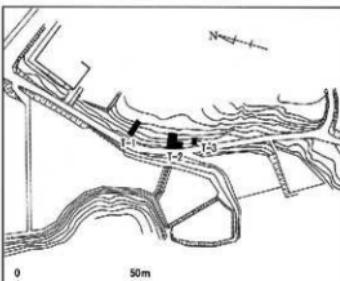


Fig. 34 天下中須遺跡(第1次)調査区配置図  
(1/2,000)

### (4)出土遺物

鉄滓、陶磁器片、須恵器片

### (5)まとめ

今回の調査では、遺構は確認されなかつたが、須恵器片等の古墳時代の遺物が、わずかにながら出土している。また興味深いのは鉄滓が出土していることである。今後、丘陵頂部付近で開発等が計画された際は注意が必要であろう。



PL. 30 天下中須遺跡(第1次)調査状況

## 12. 野田八田遺跡（第4次）

所在地 延岡市野田町5290 外

調査原因 集合住宅建設

調査期間 20091019～20091028

調査面積 15.0 m<sup>2</sup>

担当者 尾方

処置 工事実施

### (1)位置と環境

調査地の所在する野田町は、五ヶ瀬川が大瀬川と分歧し、1km程流れ下り北に大きく流れを変え蛇行する左岸の平野部と、北東に延びる低丘陵地帯に広がっている。付近には国指定史跡南方古墳群の野田・野地支群が分布し、古くから周知の埋蔵文化財包蔵地として知られている。

調査地は低位丘陵の裾部にあたり、調査地のすぐ南の低位丘陵には、国指定史跡南方古墳群第37号墳が分布している。第37号墳は古くから墳丘が失われており、長さ2.7mに及ぶ県内最大の刳抜式家形石棺が露出している。詳細な調査が行われていないため、墳丘自体が存在したのか、或いは石棺自体が持ち込まれたものなのか不明である。ただし、他に例を見ない非常に大型の石棺であり貴重な資料であろう。

調査地の南西約500m南西の丘陵上には、未調査であるが南方古墳群第38号墳の円墳が存在する。第38号墳が所在する丘陵の裾部は、野田町八田遺跡として1977(昭和52)年に調査が行われており、弥生時代終末期の堅穴住居跡1軒が報告されている。主な出土遺物は、櫛描波文状を有する二重口縁壺、石包丁、石繩、石錐、石斧などである。また、南に約200mの丘陵では、1993(平成5)年に民間の宅地造成に伴い、八田遺跡第2地点の調査が行われており、土師器片や高杯の脚部等の遺物が出土している。2003(平成15)年には第37号墳の所在する低位丘陵を取り囲む様に通る市道の拡幅工事に伴い、野田八田遺跡群（第3次）調査が行われている。この調査では、目立った遺構・遺物は検出されていない。



Fig. 35 野田八田遺跡(第4次)調査区位置図  
(1/15,000)



Fig. 36 野田八田遺跡(第4次)調査区配置図  
(1/2,500)

## (2)調査の概要

今回の調査地点は、包含層の遺存状況と遺構の検出に主眼を置いた。調査地内で2箇所のトレンチを設定し、調査を行った。両トレンチとともに、現地表から約150cm以上の盛土が確認された。トレンチ2の地表下約150cmのところで礎石状の石を検出した。検出された礎石状の石は、非常に簡易なつくりであるとともに、その設置された土を観察すると、非常に粘性が高く、重量を掛けると傾いたり、沈んだりする可能性が考えられる。直上の層で出土した微量の遺物も、昭和の後半の遺物と判断され、その時期も古く遡ることはない」と判断した。

## (3)検出遺構

礎石1個

## (4)出土遺物

なし

## (5)まとめ

今回の調査地点は、埋土により高く造成されており、第37号墳の所在する低位丘陵の影響を受けていないことが判明した。検出された礎石も非常に簡易なもので、恒久的な建造物を支えたとは判断しがたかった。今後とも周辺の開発には留意する必要があるが、特に第37号墳の所在する低位丘陵には注意が必要であろう。



PL. 31 野田八田遺跡(第4次)調査前近景(南から)

### 1.3. 天下城山遺跡（第3次）

所在地 延岡市天下町527-乙 外  
調査原因 宅地造成  
調査期間 2009.12.09～2009.12.15

調査面積 11.0 m<sup>2</sup>  
担当者 高浦  
処置 工事実施

#### ①位置と環境

調査地は、市中心部から西へ約3.4kmの五ヶ瀬川が大瀬川と分岐し北へ大きく湾曲した部分に張り出した舌状丘陵北端に位置する。

この丘陵には国指定南方古墳群10号墳が立地するほか、天下城山遺跡（中世城郭）が所在している。当該丘陵は平成11年、携帯電話基地局建設に伴う調査から、弥生時代の構造構が検出されている。また平成15年、高速道路建設に伴う調査で主郭を含む各曲輪の調査が実施されている。

今回の計画地は、天下城山遺跡が展開する丘陵裾部にあたることから確認調査を実施した。



Fig. 37 天下城山遺跡(第3次)調査区位置図  
(1/15,000)

#### ②調査の概要

今回の調査地点は、天下城山遺跡の丘陵裾部にあたる。現況では後世の開発により丘陵を削平されているが、遺構の残存状況を確認するため開発予定地内に3本のトレンチを設定し、重機を使用し調査を実施した。

その結果、削平を受けた地山の上に客土による造成が行われ、現代の水田耕作が行われていたことが判明した。

#### ③検出遺構

現代の水田址



Fig. 38 天下城山遺跡(第3次)調査区配置図  
(1/2,500)

#### ④出土遺物

なし

#### ⑤まとめ

今回の調査では、遺構・遺物の確認はされなかつたが、周辺調査では弥生時代の構造構・古墳・中世城郭が確認・所在していることから、引き続き周辺開発に留意が必要であろう。



PL. 32 天下城山遺跡(第3次)調査状況

## 報告書抄録

ふりがな	しないいせき
書名	市内遺跡
副書名	平成21年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	延岡市文化財調査報告書
シリーズ番号	第42集
著者名	山田聰、小野信彦、尾方農一、高浦哲、甲斐康大
編集機関	延岡市教育委員会
所在地	宮崎県延岡市東本小路2-1
発行年月日	2010年3月31日

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
舞見田中遺跡	延岡市北川町 川内名6443-2外	452033		32° 42' 10"	131° 41' 57"	2009/0212 ~ 2009/0312	60.0m <sup>2</sup>	農業基盤整備事業
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
			石垣		無			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡 (第19次)	延岡市桜小路 369-3	452033	3018	32° 34' 46"	131° 39' 39"	2009/0225 ~ 2009/0227	10.0m <sup>2</sup>	個人住宅
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
城跡	中・近世		無		陶磁器・瓦			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
延岡城内遺跡 (第20次)	延岡市天神小路 310-25	452033	3018	32° 34' 47"	131° 39' 34"	2009/0312	5.0m <sup>2</sup>	個人住宅
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
城跡	中・近世		無		陶磁器			
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
南久保山 第1地点	延岡市北方町 南久保山子3325-2-3	452033		32° 34' 17"	131° 31' 37"	2009/0218 ~ 2009/0220	6.0m <sup>2</sup>	市道改良工事
種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
			無		石器			

所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北久保山遺跡 (第1次)	延岡市北方町 北久保山字3879番外	452033	41	32° 34' 41"	131° 31' 48"	2009/0223 2009/0302	22.0m <sup>2</sup>	市道改良工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	縄文～近世	十坑		剥片・縄文土器・石斧・土鍤・弥生土器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしへらいせき 東原遺跡 (第5次)	延岡市北方町 川水流卯967-6	452033	37	32° 34' 05"	131° 31' 36"	2009/0317 2009/0319	7.0m <sup>2</sup>	市道改良工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	旧石器～近世	無		剥片・縄文土器・弥生土器				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひがしへらいせき 東原遺跡 (第6次)	延岡市北方町 川水流卯963-5-7	452033	37	32° 34' 03"	131° 31' 28"	2009/0309 2009/0310	14.0m <sup>2</sup>	個人住宅
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	旧石器～近世	無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひでじちちよし の出町1丁目 角原地点	延岡市日の出町 1-9-10	452033		32° 35' 16"	131° 40' 26"	2009/0430 2009/0501	5.0m <sup>2</sup>	個人住宅
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
		無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
かみたたらいせき トドヶ良遺跡 (第12次)	延岡市古川町 430	452033	3012	32° 35' 14"	131° 39' 12"	2009/0518 2009/0609	1400.0m <sup>2</sup>	地区西 整理事業
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
散布地	古墳	無		須恵器・土師器・ガラス玉・管状				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おきたかいづか 沖田貝塚	延岡市小野町 くもひばりいしきたづか 口広橋北詰	452033	5506	32° 33' 05"	131° 39' 03"	2009/0617 2009/0617	7.68m <sup>2</sup>	市道改良工事
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
貝塚	縄文	無		無				
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
あもしりなかすいせき 天下中須遺跡 (第1次)	延岡市天下町 169外	452033	4064	32° 34' 38"	131° 37' 43"	2009/0721 2009/0824	46.0m <sup>2</sup>	市道改良工事

種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
散布地	古墳		無		須恵器・鉄斧・陶磁器		
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 調査原因
野田八角遺跡 (第4次)	延岡市野田町 5290番外	452033	4072	32° 34' 35"	131° 38' 15"	2009/1018 5 2009/1028	15.0m <sup>2</sup> 集合住宅
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
集落跡	縄文～古墳		建物礎石		無		
所収遺跡名	所在地	市町村コード	遺跡コード	北 緯	東 緯	調査期間	調査面積 調査原因
天下山遺跡 (第3次)	延岡市天下町 527-乙番外	452033	4063	32° 34' 31"	131° 37' 46"	2009/1209 5 2009/1215	11.0m <sup>2</sup> 個人住宅
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
城跡	中世		無		無		

## 市内遺跡

平成 21 年度市内遺跡発掘調査事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

---

延岡市文化財調査報告書第 42 集

2010 年 3 月 31 日

発行：延岡市教育委員会  
宮崎県延岡市東本小路 2 番地 1

印刷：安井株式会社  
宮崎県東臼杵郡門川町大字加草 2725 番地